

可視化されるアーティスト・マザーの現状と課題

著者	高橋 律子
著者別表示	TAKAHASHI Ritsuko
雑誌名	人間社会環境研究
号	45
ページ	29-46
発行年	2023-03-31
URL	http://doi.org/10.24517/00068979



可視化されるアーティスト・マザーの現状と課題

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

高橋 律子

要旨

アート・ワールドにおけるジェンダー不平等の是正を求める社会的な動きを背景に、アーティスト・マザーの課題に注目が集まりつつある。筆者は2018年より子育てアーティストの課題について継続的な調査を行ってきたが、2022年にイギリスのアーティスト・マザーたちにより制作された маниフェスト「子育てするアーティストを排除しないために」の日本語訳が公開され、アーティスト・マザーの課題が明確になるとともに、支援のあり方についての議論も始まった。本稿は7節で構成される。

1. アート・ワールドにおけるジェンダー不平等の実態
2. 「子育てするアーティストを排除しないために」の公開
3. アーティスト・マザー特有の課題 イギリスと日本の調査の比較から
4. 育児の始まりは創作の終わり？
5. プロのアーティストとは誰か
6. アートと育児
7. 「子育て中の女性アーティストの実態調査」の追跡調査

まず、1では2020年以降の美術界におけるジェンダー平等を求める具体的な動きについて例示し、ヴェネチア・ビエンナーレを始め、女性アーティストたちが注目を集めている現状を確認する。2では「子育てするアーティストを排除しないために」のステートメントの分析を行い、①アーティストの評価の問題と、②働きやすい環境への提案に分類することができるとし、キャリアへの門戸を閉ざす①の課題の解決がより重要であることを示す。3では、筆者が2018年に実施した日本での調査と、イギリスで実施された調査を比較検討し、国を超えて共通するアーティスト・マザーの課題を整理する。4は、NHKの取材記事「育児の始まりは創作の終わり？」に対する記事受容者のSNS上の反応についての分析。5は、高橋かおりの指摘する「曖昧な」アーティストとしての「予備軍」と、育児でキャリアを中断する若いアーティストたちを重ね、アーティスト・マザーの課題をアート・ワールド独自のキャリア形成のあり方から検証する。6では、美術館等においてまだ育児支援が不十分であることを指摘。7では、2022年に筆者が実施した2018年調査での回答者を対象とした3人の追跡調査から「生活者としてのアーティスト」という視点こそ、現代のアーティストに共有する価値観であることを明らかにする。

キーワード

アーティスト, 子育て, ジェンダー

Visualization of the Current Situation and Challenges
for Artist Mothers

Division of Human and Socio-Environmental Studies
Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies

TAKAHASHI Ritsuko

Abstract

The author has been conducting ongoing research on the challenges of artists raising children since 2018. Against the backdrop of social movements calling for the correction of gender inequality in the art world, the challenges of artist mothers are attracting increasing attention. The Japanese translation of the statement, "How not to exclude artist parents," produced by artist mothers in the United Kingdom in 2021, has clarified the issues artist mothers face and initiated discussions on how support should be provided. This report consists of seven chapters. Section 1 gives examples of specific movements for gender equality in the art world after 2020 and confirms the current situation in which female artists are attracting attention. In section 2, the author analyzes the statement "How not to exclude artist parents," and Section 3 compares a survey conducted in 2018 in Japan and in the U.K. in 2021. Section 4 is an analysis of the reactions on social networking services of the recipients of the NHK article, "Is the beginning of child-rearing the end of creation?". Section 5 examines overlaps the post-profession of "ambiguous" artists as pointed out by TAKAHASHI Kaori and young artists who interrupt their careers to raise their children, and examines the challenges of artist mothers from the perspective of the art world's unique career development. Section 6 pointed out that childcare support is still inadequate in museums and other institutions. Section 7 analyzes a follow-up survey of three respondents to the 2018 survey conducted by the author in 2022. The analysis reveals that the perspective of "artists as living people" is a value shared by contemporary artists.

Keyword

Artist, Parenting, Gender

はじめに

「アーティスト・マザー」とは、子育てする女性アーティストを指す¹。美術史において女性アーティストの存在が欠落していることはすでに多くの美術史家が指摘してきているが²、子育てしながら制作を続け美術史に名を刻んだアーティストの数はさらに少ない。筆者は、2002年より美術館学芸員として20年間、美術のフィールドに携わり、今を生きるアーティストたちの参与観察を行ってきた。その過程で、出産と育児というライフイベントは、女性アーティストたちが生涯にわたって活動を続けることを妨げる要因になっているのではないかと考えるようになった。アーティストたちとの対話を重ね、それは確信になっていった。2017年より、子育てアーティストを支援する

NPOひいなアクションを立ち上げ、実践的な活動も行ってきた。本稿では、2018年に行った「子育て中の女性アーティストの実態調査」を起点に、その後のジェンダー平等意識の高まりなどを背景に広がりを見せるアーティスト・マザーの課題を明らかにする動きなどを分析し、将来的な支援のあり方を検討するものである。

1. アート・ワールドにおけるジェンダー不平等の実態

美術史が白人男性中心に構築されてきたことについて、すでに多くの研究者が指摘している。1985年から活動を開始したゴリラのマスクをかぶった覆面女性アーティスト集団「ゲリラ・ガー

ルズ」はまさに、男性中心主義のアート・ワールドに対する異議を訴える作品を展開した。ゲリラ・ガールズが活動を開始したのは、ニューヨーク近代美術館（MoMA）で開催された「絵画と彫刻の国際的調査」（An International Survey of Painting and Sculpture）という展覧会に出品された169人のアーティストのうち、女性は13人、黒人のアーティストは皆無であったことがきっかけである³。《メトロポリタン美術館に入るには、女性は裸にならなければならないの？》（1989）というポスター作品では、タイトルのスローガンと共に、「近現代美術のセクションの女性アーティストは5%以下だが、ヌードの85%は女性である」という数値が目飛び込むように書かれている。（図1）

1990年代には、ジェンダー視点の展覧会が開催されるといった動きはあったものの、フェミニズムに対するバックラッシュもあり、ジェンダー平等が実際に進んだとはいえない状況であった⁴。それが、2015年頃から各国の美術館におけるジェンダー不平等の実態を示すデータが次々と公開されるようになる⁵。各国のデータから共通するジェンダー不均衡の状況をまとめると、①美術館収蔵作家は男性が圧倒的に多く、女性が少ない ②美術館で個展を開催した作家は男性が圧倒的に多く、女性が少ない ③美術館学芸員は女性が多いが、館長は男性が多い ④美術大学の学生は

女性が多いが、教員は男性が多いという、4つの項目に集約できる。

ゲリラ・ガールズが異議を唱えたジェンダー不均衡の状況は2010年代になっても改善されたとはいえない状況であった。2020年代になると、もはや社会現象といえるほど、アート・ワールド全体で、女性だけでなく性的マイノリティを含め、ジェンダーバランスを是正しようという動きが一機に加速する⁶。何をきっかけにしているか特定できてはいないが、SNSの普及を背景に、女性たちの緩やかな連帯が広がり、さらに2017年頃からの#MeToo運動が拍車をかけたのではないと思われる。

こうした動きは、世界最大の現代美術展のヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展の変化に現れている。2017年には女性アーティストの割合は35%にすぎなかったが、2019年に初めて女性アーティストの割合が半数を超えたのに続いて、2022年には、213人（組）のうち男性アーティストはわずか21人で、女性または伝統的な性規範にとらわれないアーティストが大多数を占めた⁷。また、アメリカのボルチモア美術館では、2020年の1年間、女性アーティストの作品のみを展示・収蔵するプログラム「2020 Vision」を実施し、女性アーティストの作品購入費として250万ドル以上の予算を投じている⁸。

日本は、2019年の調査で、美術館の職員構成が、

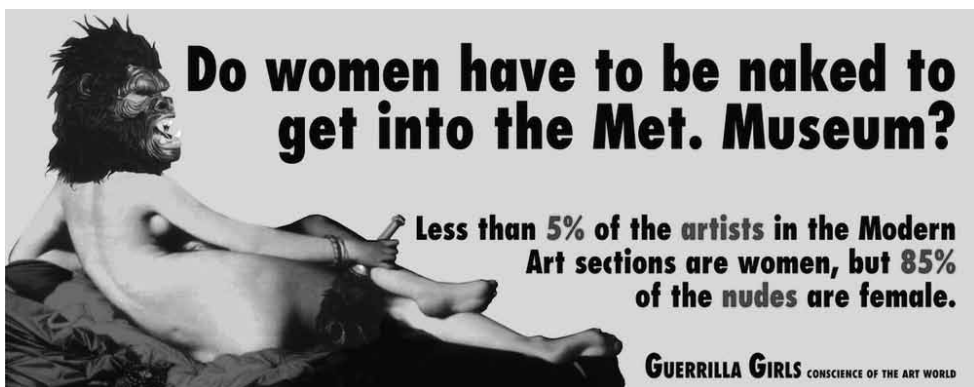


図1 GUERRILLA GIRLS 《DO WOMEN STILL HAVE TO BE NAKED TO GET INTO THE MET. MUSEUM?》1989
出典：guerrillagirls.com（最終アクセス：2022年12月4日）

学芸員は男性26%、女性74%と圧倒的に女性が多いのに対して、館長職は男性84%、女性16%と重要ポストのジェンダー格差が明るみになったが⁹、2019年国立新美術館に館長に逢坂理恵子、2020年森美術館館長に片岡真美、横浜美術館館長に蔵屋美香、2021年金沢21世紀美術館館長に長谷川祐子、2022年に東京都庭園美術館館長に妹島和世が起用されるなど日本有数の美術館館長への女性の起用が相次いでいる。

アーティスト・マザーの課題について、2010年代は、子育てするアーティストへの取材記事がメディアに掲載されることはあっても、筆者の知る限り研究や調査はなかった。ジェンダー平等に関して先進的なヨーロッパやアメリカでも状況はそれほど変わらなかったようだ。「子育てするアーティストを排除しないために」というマニフェストは、2020年にヘッティ・ジュダーが55人のアーティスト・マザーへのインタビュー調査の報告が掲載されたテキストを発端に作成されている。¹⁰

2. 「子育てするアーティストを排除しないために」の分析

ウェブ上で、マニフェスト「子育てするアーティストを排除しないために：文化施設やレジデンスのためのガイドライン」が15か国語に翻訳され、2022年1月には日本語訳が公開された。このステートメントは、2021年3月4日にロンドンのフリーランズ財団が主催したオンラインディスカッション「アーティスト・マザーを排除しないために」(How Not To Exclude Artist Mothers)で発表された。全文は下記のとおり。¹¹

1. 組織として、家族連れのアーティストを積極的に受け入れる

アーティストが親になっても連絡を取り合い、授乳に対する配慮を心がけてください。アートが家族連れにも親しみやすい必要はありませんが、文化施設は家族連れに寛容であるべきです。

2. プロジェクト開始時にアーティストの家族状況を把握し、アーティストが子育ての責任を果たせるような体制を整える

親であることを「告白」しなければならないとか、そうすることで展覧会や制作依頼、レジデンスなどの機会を失うかもしれないという不安をアーティストに抱かせるべきではありません。

3. 子育てをするアーティストは移動や旅行の際に子どもやパートナー、またお世話をする人などの同行者がいることを想定し、受け入れに備える

4. プロジェクトの始めに、いつ何が必要なのかをアーティストと共に合意し、互いがそれに伴う計画を立てられるよう、作業にかかる十分な時間を与える

文章作成やトークなどの急な依頼を直前にしないでください。

5. アーティストの保育料にかかる予算を考慮する

アーティストと、保育に必要なコストを話し合い、提供できるもの・できないものを明確にしましょう。

アーティストが保育に必要な部分は直接経費として請求できるようにし、収入として課税されないようにしてください。

6. 展覧会のオープニングや関連イベントは、子育てをしているアーティストにとって都合がつきやすいスケジュールにする

夕方以内覧会を行うことにこだわらず、週末の日中に行うなどの選択肢も考慮してください。夕方の時間帯は夕飯、お風呂、寝かしつけなど子どもの世話に費やされるため。

7. 学校の学期や行事に配慮する

子どもと一緒に移動する必要のあるアーティストのために、例えば学校の休暇中に展示設営を行うなどの選択肢を提供してください。

8. 出産や育児によりキャリアを中断しているアーティストが対象に含まれるように、レジデンスプログラムやアワードの年齢制限をなく

す、もしくは見直す

9. 子育てのニーズに合わせてレジデンスの期間を調整する

例えば、アーティストが滞在期間をより管理しやすいように、分割できるようなシステムの導入をしてください。もしアーティストが移動できない状況にあるならば、自分たちのスタジオでリサーチやアイデアを展開させられるようなサポートも必要です。

10. 活動歴の空白をアーティストの努力や実績の欠如とみなさない

アーティストとしてのキャリアには様々な形があります。そしてそれは、色んな理由によって中断されてしまいます。その理由の一つに、子育てがあるのです。新鋭のアーティストは、必ずしも新卒であるとは限りません。

まず、前提について確認しておく。このマニフェストは「アーティスト・パレント」が対象となっており、母親に限定されない。日本語への翻訳に男性アーティストである田中功起も含まれている。マニフェスト自体はアーティスト・マザーたちが中心となって作成したものであるが、内容としてはジェンダーの要素は取り除かれ、子を養育するアーティスト全般が対象となっている。

10の項目は、大きく2つ、①アーティストの評価の問題(1,8,10)と、②働きやすい環境への提案(2-7,9)に分類することができる。②では、事前にアーティストと計画を話しあい、作業にかかる十分な時間を確保することや(3)、学校の行事や学期などへの配慮(7)、レジデンス期間の分割(9)など、子どもがいても働きやすい環境についての提案であり、雇用労働者に共通する課題だとも言えるが、①は、②を議論する以前にキャリアへの門戸を閉ざしてしまうというアーティストのキャリア形成に関わる大きな問題を抱えている。文化施設やレジデンスは、膨大にいるアーティストのなかから、アーティストを評価し、展覧会やレジデンスの機会を資金とともに提供していくのだが、その対象者から、子育てしていることを理由

に排除していくという構造こそが課題だということである。ジュダーはアーティストたちの体験談から、排除される状況を次のように記している。

アーティストは妊娠したとたん、母親になることの衝撃を実感することになる。キュレーターやギャラリスト、委託団体らの態度はすでに変化している。一人の妊婦となったアーティストは、相談なく予定をキャンセルされた。もう1人のアーティストは、家族を持つという決断を決して認めないギャラリストと緊張関係を経験したという。他には、文化施設やギャラリー、支援団体との対話の機会が全くなくなったり、減少したりした。だから、仕事を失うことを恐れ、できるだけ大きくなったお腹が目立たない洋服を選び、妊娠を隠そうとする女性アーティストが多くいることは想像するに難くないだろう。すでに不安定で先を見通しづらい職業であるから、妊娠はさらにその不安を煽る。時間どおりにプロジェクトを完成させることができるのか？ 制作費の支払い損になってしまうのではないか？ 出産後も制作できるのか？¹²

数いるアーティストの中から誰を選出するか、明確な基準があるわけではない。芸術の評価が重要なのももちろんだが、展覧会の全体経費も、アーティスト・フィーも選出するうえで重要な要素となる。例えば、国内作家か海外在住作家かで、作品の輸送費や作家本人の旅費など展示にかかる経費は大きく異なるため、国内作家、地元在住作家を選出することは大いにある。それと同様、限られた準備期間のなかでプロジェクトを完成できる作家かどうかという観点も文化施設は常に持っている。作品の内容だけで、作家へのオファーが決まるわけではない。だとすれば、アーティストが妊娠していたり、出産直後であった場合、身体的トラブルも想定される。出産後、新生児を置いて外出することの困難さを勝手に想像し、オファーを控えるという事態も十分にありえる。その配慮

が結果として、子育てアーティストを排除していくことにつながっていく。

こうした現象は、アーティストに限らず、フリーランスで働く女性たちの課題として捉えることもできる。2017年に、「雇用関係によらない働き方と子育て研究会」が実施した緊急アンケートでは、20～50歳までのフリーランスまたは法人経営者等で、雇用関係にないため産休・育休を取得できず、働きながら妊娠・出産を経験した経験のある女性を対象に、353件の有効回答を得ている¹³。2017年のフリーランス人口は日本全体で1122万人、そのうち49%が女性である¹⁴。「妊娠・出産・育児を機に仕事の状況がどうなったか」という問いに対して、「育児に専念するため自分から望んで仕事を辞めた」2.3%、「両立の苦勞から仕方なく仕事を辞めた」5.7%、「取引先等から仕事の契約を切れ、辞めざるを得なくなった」2.8%と、仕事を辞めた人の割合は、10.8%。「仕事は継続しているが仕事量が減った、減らした」と回答した人が65.2%。「出産前と変わらない水準で仕事を継続できている」と回答した人は全体のわずか16.4%であった。フリーランスで自由な働き方ができている女性たちだが、出産を契機に仕事量が大きく減少するという現実がある。さらに、仕事量が減少した人を含めて、仕事を継続している人の59%が産後2カ月以内に仕事復帰している。産前産後の休業もなければ所得補償もないフリーランスの女性は、身体に負担をかけながら仕事を継続しているのが現状である。次項ではフリーランスの労働者であるアーティストに特有の課題を取り上げる。

3. アーティスト・マザー特有の課題 イギリスと日本の調査の比較から

「子育てするアーティストを排除しないために」を作成するきっかけとなったのは、ケイト・マクミランの「女性アーティストの現状2019」(Dr Kate McMillan, *Representation of Female Artists in Britain during 2019*) のレポートに掲

載された、ヘッティ・ジュダーによるテキスト「めいいっぱい、めちゃくちゃで、美しい」(Full, Messy and Beautiful) である¹⁵。ジュダーは、55名の子育て中の女性アーティストにメールないしZOOMでインタビューを実施し、アーティスト・マザーの課題を提示した。一方、筆者は、2018年12月に53人の子育てする女性アーティストに対して「子育て中の女性アーティストに関する実態調査」を行った¹⁶。ジュダーの調査と筆者の実施した調査結果は共通項が多くあった。

ジュダーの調査は、イギリスに関係する子育てする女性アーティストを対象とし、年齢は規定していない。筆者の調査は、海外在住者も含め日本にルーツを持つ子育て中の女性アーティストを対象とし、子どもや本人の年齢規定を設けなかった。対象者を限定することの難しさもあるが、結果、両調査とも多様な経験談を集めることにつながっている。両調査の結果の共通項の多さから、アーティスト・マザーの課題が世界的なものであるという認識のもと、両調査の比較検討を行うこととした。ジュダーの調査をA、筆者が実施した2018年の調査をBとして比較する。

3-1. 制作時間、環境の確保

- ・朝5時に起きて夫が出勤するまでの3時間制作し、日中は子どもと過ごし、子どもが寝てから制作を再開する。(A)
- ・子どもが寝ている時間を制作時間にしていきます。寝かしつけると同時に疲れてしまいそのまま眠ってしまうことも多いので、早起き(4時、5時)して制作することが多い。(B)

Bの調査では、制作時間を確保する方法として53名中21名が「子どもが寝てから」と回答している。それ以外にも、「睡眠時間を削る」とした回答者が7名、「早朝」とした回答者が9名いる。それは、「制作するものが、子どもたちの危険のないようにしなければならぬ。(A)」というように、アート作品の制作は、絵画であれば絵具や

溶液、彫刻であれば刀、陶芸であっても粘土など、子どもが手にしたり口にしたりすることが危険なものを多数携えながら作業することになる。素材の性質からも作業を一時的に中断するということが困難な場合も多い。また、生活空間の確保から「家族のためにアトリエをあきらめ、小さい作品しか作れなくなる。また絵画のように時間をとれないビデオや音楽、写真やテキスタイルなどに制作手法を変更したりする(A)」。ジュダーは、歴史的に女性の作品が小さくなりがちであることを指摘している¹⁷。

3-2. 生活と制作の切り替え

- ・子どもの食事や教育のことなど考えることも多く、身体的なエネルギーだけでなく、精神的にもエネルギーを相当使い、制作する精神的余裕がなくなる。(A)
- ・主婦である感覚と作家である感覚が全然違う発想の中にあり、気持ちのコントロールが上手く出来ない事が一番辛いと思います。スイッチのオン、オフが上手く出来れば制作もスムーズに出来て短い時間でも作家活動は可能ですが、子どもは待ってくれない、わがままを言う、小学生になれば児童クラブや習い事で更に忙しくなり、とにかく時間が奪われていきます。その中で作家として気持ちを高め続けるのは難しいです。(B)
- ・子育てというものはどうしても生活という現実がつきまとうものであり、制作活動をする際の思考とは離れてしまうことになり、たとえば時間ができたとしてもきもちの切り替えが難しい時がありました(B)

Bの調査では、設問項目がなかったにも関わらず、自由記述の欄に、生活する感覚と制作する感覚が全く異なり、切り替えが難しいという趣旨の回答が複数挙げられた。それはAにおいても、子育てが精神的エネルギーを使い、制作する余裕がなくなるというコメントにも共通する。科学的に

もホルモンの影響が明らかになってきた。出産時や授乳時に分泌されるオキシトシンは、人への信頼性を増加させる、こうしたホルモンが集中力を必要とする制作を阻害するものであるかどうかまでは不明だが、多くのアーティスト・マザーたちが切り替えの難しさを感じていることは確かである。

3-3. 収入の少なさ

- ・収入が少ないため、子どものケアする役割を担うことになり、作家活動ができないという悪循環となる。(A)
- ・子どもをほったらかして制作していることに罪の意識を感じる。そこまでしてアーティストとして活動しなければならないのかという自問自答。(A)
- ・家事育児がすでにお金にならないので、お金にならない作家活動は生活のための仕事のあとになり、いつでも優先順位は最下位になった。(B)
- ・絵の具が買えず絵を描くのはやめました。(B)

アーティストという職業で十分な収入を得ている人は少ない。収入のない仕事であるがゆえに、仕事として自他ともに認識しづらく、家庭内で作品制作の優先順位が下がってしまう。

山本和弘が2014年に行った727人のアーティストを対象に行った調査「アーティストのサバイバル 第一回実態調査」¹⁸で、回答者の年収は0～100万円が15%、100～200万円が29%、200～300万円が31%と300万円以下が75%を占める。そのなかでアーティストとしての収入は、0～100万円が77%、100～200万円が13%と全体の88%を占め、300万円～400万円は3%である。また、「新・フリーランス実態調査 2021-2022」によれば、「アーティスト・タレント」の平均年間収入は161万円である。家族に収入がある場合が多いとしても、これらのデータを参照すると、厚生

労働省が規定する2018年の貧困線127万円¹⁹とそれほど大きな差はなく、アーティストという職業だけで生きていくことが極めて難しいことは察せられる。

家庭のなかでは収入が少ないほうが家事を担うことが多い。2016年「夫婦の就労実態」に関する共働き世帯へのアンケート調査²⁰では、年収に「差はない」家庭の家事分担は「平等」が60.0%であるのに対し、年収差が「301～400万円」の家庭では「どちらかと言えば妻が担当」29.5%、「ほとんど妻が担当」54.5%など、妻が家事を主に担当している家庭が93.1%という結果であった。収入が少ないことで家事や育児を担い、それによって制作する時間が奪われていくという構造になる。また、稼いでもいない作品制作に貴重な時間を割くことに罪の意識を感じるというAの記述があったが、日本のアーティストからも聞く言葉である。

3-4. キャリアが途絶えることへの不安

- ・美術関係者が集う6時から8時という時間に子どもがいると出かけていくことができないことでチャンスを失っていく。(A)
- ・一度制作をやめたらもう戻れないのではないかという不安。(A)

Aの調査ではアート・ワールドから排除されることへの不安は多く語られていた。Bの調査でキャリアについてのコメントが少なかったことを鑑みると、イギリスのアーティストたちのほうがキャリアに対する意識が高い可能性があり、「子育てするアーティストを排除しないために」も、全体を通してキャリアを継続するため訴えとなっている。日本のアーティストたちは、キャリアよりも制作時間をどう確保するか、制作をなぜ続けているのかという個人的な問題として内面化されていると思われる。

4. 育児の始まりは創作の終わり？

筆者が調査した「子育て中の女性アーティストに関する実態調査」は、2019年からNPOひいなアクションのウェブサイトにて公開していたが、2020年12月に文化政策学会の企画フォーラム月間「アーティストの生活をどのように調査するのか? — 研究と実践の協働に向けて」での発表、2021年以降、その内容について、美術館、文化施設、アーティスト、そしてNHKから計4件の問い合わせを受けた。「アーティスト・マザー」への社会的な関心の高まりは、美術界のジェンダー不均衡に対する社会的な動きを反映していると捉えている。

NHK金沢は筆者の調査データをもとに取材した「育児の始まりは創作の終わり？」を放映し、取材記事が2021年12月27日にウェブ公開されると²¹、Twitterでは少なからぬ反響があった。公式の「NHKニュース」のTwitterへの反応は、2022年9月21日時点で133リツイート、18引用ツイート、180いいね、ウェブ版「美術手帖」の橋爪勇介が「良記事だ」と「NHKニュース」の記事をリツイートしたツイートに対しては、138リツイート、20引用ツイート、425いいね、があった。Twitterのコメントは140字と制限があり、匿名で発信され内容の真偽を判断することが困難で調査としての有効性は限定的ではあるが、アンケート取材のように依頼を受けて発する言葉とは異なり、受容者自身が自発的に発する言葉には実感が反映されており、発信された記事に対する受容者の態度として参照できるものだと判断した。NHKと橋爪氏のツイートに対する引用ツイート計38件の主な意見は、記事への賛同：9件、自分も同じ状況であることの記述：8件、記事内での筆者が発したコメント「日本には“収入のある仕事が職業である”という社会通念がある」に対する意見：7件、「男性が育児取れば解決」「父親も同様」など男性についての指摘：2件、結婚や育児は創作に生かすことができるという反対意見：2件、その他、特に立場を示すものでない記述が

10件であった。自分も同じ状況であることを記述したツイートは、2018年の調査内容と重なった。

- ・泣きたくなくなってしまった。子育てだけじゃない。仕事をして、アーティストとして名乗るのが憚られることは多く、趣味でしょとか、お金にならないのにやってみて意味があるのかなんでそんな事言ってみて筆をおらせようとするんだらうって思う事がこれまで滅茶苦茶多かった。モノを作る事を下に見ないで欲しい。(ミツマチヨシコ, 2021年12月27日)
- ・この数年は単純に寝る時間を削ってきたからなんとか続けられた(と呼ぶにも恐れ多いくらい)けど、身体も心もそろそろ限界。家庭をとるか制作をとるか、の二元論に可能性を感じるわけもなく、2022年はひとまず労働を減らす。(立石従寛, 2021年12月27日)
- ・さらに家庭持ち地方在住作家には作品発表するにも運送費がかかり、在廊するにも子どもの預け先を探したり交通費や滞在費にお金がかかりすぎるので作品の売上では賄いきれなくて諦めざる得なくなるのです。(トサカネコ舎, 2022年1月4日)

また、取材において筆者は、日本では収入のある仕事が職業だという社会通念があることによって、アーティストたちの制作を仕事ではなく、趣味のように捉えられてしまうことが課題だということを指摘したが、それについての反応も多数あった。

- ・創作する人が職業欄にアーティストを書きにくいのは「創作なんて遊び」と創作は崇高なもので金稼ぎなんかじゃない」という軽視と神聖視がべっちょりまざった変な特別視がある気がする。当事者にも非当事者にも。(トウギリ, 2021年12月31日)
- ・仕事は、自分の機能を社会に提供するためのもの。アーティストは立派な職業。(鈴木舞/TICEコーチ, 2021年12月27日)

- ・収入が高いものが職業って、誰が決めたのってなるけど、実態だと思う。選択できないことがどれだけ地域や果ては国？にとってマイナスになるか想像してほしい。政治・行政もさることながら、私たちの中にも「趣味」で片付けてしまっている表現があると思う。自助努力では言外がある。生きたい(伊豆野眸 Hitomi Izumo, 2021年12月28日)

5. プロのアーティストとは誰か

アーティストや芸術家の定義は定められていない。だが、2020年1月からの新型コロナウイルス感染拡大の影響で文化芸術活動が実施できなくなった状況に対し、文化庁は「文化芸術活動の継続支援事業」を実施した。文化庁は、誰を支援するかという対象者を定めたことで、アーティストを含めた「文化活動を実践する人」に対する一つの指針を示したといえる。この補助金はできるだけ多くの人を支援するという目的を持ち、フリーランスの個人の応募は、88,946人、そのうち採択された人数は74,025人で83%の採択率であり、かつてない規模の文化活動を実践する個人に対する支援であった。²²

「文化芸術活動の継続支援事業」で対象とされた分野は、音楽、演劇、舞踊、映画・アニメーション・コンピュータその他の電子機器等を利用した芸術、伝統芸能(雅楽、能楽、文楽、歌舞伎、組踊、その他)、大衆芸能(講談、落語、浪曲、漫談、漫才、歌唱、その他)。そして、最後に括弧つきで(・美術、写真、茶道・華道、書道、国民娯楽(囲碁・将棋・その他))と記され、そこに※を付けて「個展の開催や対局の公開で収入を得るなど、条件①②③を満たす場合は対象」と補足された。

この助成金の条件が「不特定多数に公開することによってチケット収入等をあげることを前提としたもの」となり、過去3年に2回事業を行い、お金を得たという証明があることが基準とされた。そのため、2019年以前に文化芸術活動において収入がなかった個人は対象とならなかった。こ

れについては、文化庁と獨協大学が共同でおこなった「新型コロナウイルス感染症の影響に伴う諸外国の文化政策の構造変化に関する研究」で、朝倉由希が課題として「プロの実演家やスタッフであることの確認の難しさ」を挙げ、「そもそも日本においてプロの芸術家の定義はあいまいである」ことを指摘している²³。

美術等が括弧付きと記されているのは、「文化芸術活動継続支援事業」が主に舞台関係者を中心とする団体らの要望から実現した事業で、当初、美術等は助成対象から外れており、後に追加された。申請には、「事業収入証明書」や活動歴を示す書類の提出が求められ、申請の準備および審査に時間がかかることから、芸術家やスタッフが所属する職能団体が「事前確認認定団体」となり、各団体から確認番号が発行されれば、条件を満たしているとみなす方法が取られた。しかし、美術分野に関しては、若手フリーランスも属する統括団体となり得る組織がなく混迷した。最終的に、日本美術家連盟のもと「無所属系作家確認証発行連合体」が組織された。その事務局を担った京都芸術センターの山本麻友美は、「アーティストの証明——制度のなかで見てきたこと」²⁴において、戦後、政治的な働きかけも行ってきた美術関係団体ほぼ全てが会員の高齢化に直面しており、若手中堅アーティストが何らかの団体に所属し、権利を主張する、あるいは社会保障制度や文化行政のあり方に目を向ける動向が完全に失われたことを指摘した。山本は、アーティストが群れずに集まりつつ民主的な方法で声を届ける仕組みを作ること、また、アーティストである証明が何によってなされるべきか考え直す必要性があるとした。

美術分野の場合、プロフェッショナルが必ず収入と直結しているとは言い難い。舞台芸術の場合、収入が経費を上回っているかはともかくとして、舞台のチケットは有料で販売される。一方、美術系の画廊やギャラリーの入場は基本的に無料で、作品が販売されて初めて収入が生まれるという構造になっている。高橋かおりは、芸術家の定義について検討するとともに、「曖昧な芸術家」

の存在について指摘する²⁵。高橋は、「曖昧な芸術家」として、「予備軍」「熱心なアマチュア」「支える職業」の3類型を挙げる。高橋によれば「予備軍」は、収入の有無は場合により、あったとしても多くはない。しかし、芸術についての教育や（少なくともある程度の）訓練は受けている。「プロフェッショナルな芸術家」であるという自己認識も、他者からの承認も十分ではないが、いずれはそうなりたいという願望があり、芸術創造においては中心的な位置で活動したいと考えている人たちである。「予備軍」は、「プロフェッショナルな芸術家」であることの他者承認を得、そのことによって自己認識することを目指す層であり、収入はやがて「プロフェッショナルな芸術家」になることで得られることを期待する。「予備軍」は、「文化芸術活動継続支援事業」における若手アーティスト層と重なる。浅井南の調査によれば、若いアーティストが制作時間や安定した収入を得るため、戦略的に非正規雇用を選んでいるという状況もある²⁶。アーティストのキャリア形成において、20代から30代にかけては「曖昧」で、今後、プロになれるかどうかを左右する時期となる。ギャラリーの利用料もキャリアによって変わる。アーティストとしての実績がない場合、ギャラリーを利用するためには、会場の借用料が発生する。ギャラリーが集まる銀座エリアでは1日あたり5万円が相場で、6日間単位で30万円程度はかかる計算となる。地方のギャラリー利用料は1日1万円程度だったりもするが、できるだけ多くの美術関係者に見てもらえるチャンスを得るために、銀座での展示は若手の一つの目標でもある。若手アーティストの場合、会場借用料や制作費は基本、自己資金となる。キャリア形成のための登竜門として公募展もあり、賞金が出て、展示の機会なども得ることができるとは言えるが、出品料がかかる。すなわち、プロのアーティストになるためには、キャリア初期に自己資金を投入し、質の高い作品を発表し、露出を増やしていくことが必要な構造である。実績を積み、アーティストとして注目されるようになると、ギャラリーと繋がることがで

き、ギャラリーの企画展として自己資金なく展覧会を開催したり、プロジェクトに参加できるようになっていく。アーティストとしての評価が高まれば、文化施設や美術館、アートプロジェクトから出品依頼があり、制作費実費以外にアーティスト・フィーが提供される。公的機関での展覧会の機会が増えれば、作品の価格も高騰し、収入は安定していく。すなわち、キャリア初期や中期はアーティストという職業で収入を得ることが難しいどころか自己資金を投じる割合の方が多く、そこを耐えて、作品の露出を増やしていくことでチャンスは増加し、自他ともに承認されるプロフェッショナルなアーティストとして活躍し、収入を得る可能性が高まっていく。

アーティストにとって出産・育児のリスクは、20代、30代の露出を増やしていく必要のあるキャリア初期に、活動を縮小しなければならなくなることである。自己資金と時間を使い、投資し続けた先にプロのアーティストの道が開けているため、ブランクの期間があると美術関係者に忘れられ、関係性の構築を一からやり直さなければならなくなる。子どもがいて制作環境が確保できなくなるだけでなく、ギャラリーや学芸員たちの配慮や不安から活動機会を奪われてしまうことは、プロのアーティストになる可能性を奪うことにもつながる。事実、出産育児を機に制作を辞める女性作家は多く、美術界のジェンダー格差を生む一因となっている。

6. アートと育児

吉澤弥生はアーティストだけでなく、有期雇用のアートマネージャーやディレクターも「芸術労働者」とし、不安定な労働環境について指摘を行ってきた。非正規雇用で、休業制度も時短制度もないため出産育児を機に離職せざるを得なかった女性もおり²⁷、アーティストに限らず、芸術労働者は育児の負担を抱えている。

アーティストを労働者として捉える視点は、「芸術」が「アート」という言葉で語られ始めた1990

年頃から、神聖な芸術から社会を構成する一要素としてのアートへと価値が変換し、生まれてきたのではないかと考えられる。「アート」は和製英語であり、具体的に示すものがあるわけではないが、これまで芸術とは「ハイアート（高級芸術）」を指していたのが、ポップカルチャーなども内包し、範囲を拡大し続けているのが「アート」だと言える。ブルデューが1960年代のフランスで見出したエリート層が高級文化を嗜好するという傾向は、1990年代以降にはエリート層が高級文化から大衆文化まで多様な文化的嗜好をもつ「文化的オムニボア」となっていることが文化社会学の研究で指摘されている²⁸。

アーティストは、かつては芸術奉職者であったが、現代では「アート」を創造する労働者である。博物館が、「至宝」を人々が拝みにくる神殿から、未知なるものに出会い、そこから議論がはじまる「フォーラム」になっていくことを美術史家のダンカン・キャメロンはすでに1970年代に指摘しているが²⁹、1990年以降、美術館はフォーラムとしての機能を増し、また現代美術の表現も社会性を帯びるようになっていく³⁰。例えば、アートを日常性と対立したものではなく、相互に依存したものであるという立場をとるリレーショナル・アートや、アーティストが対話や討論、コミュニティへの参加や協同といった実践を行なうことで社会的価値観の変革をうながす活動の総体としてのソーシャル・エンゲージドアートなど、アートと社会の関係性が問われるようになってきている。

アーティスト・マザーたちが現在直面している現実こそ、生活とアートの共存であり、子育てする環境と制作活動をどう両立させていくのか、両立させることに意味があるのか、という問いでもある。アーティストたちの気づきは、作品として反映される。例えば、2021年、Chim↑Pom from Smappa! Group個展「ハッピースプリング」展では、作家のプロジェクトとして、展覧会場内に託児所「くらいんぐみゅーじあむ」が開設された。プロジェクトに係る経費はクラウドファンディングで募集され、リターンとしてオリジナル

の塗り絵がダウンロードで提供され、その絵は会場内に展示された。本プロジェクトについて、Chim↑Pom from Smappa! Groupのメンバーで、アーティスト・マザーでもあるエリイは、「くらいんぐみゅーじあむ」は、鑑賞者が子どもの泣き声を聞く環境を作り出すことを意図したと語っている³¹。このプロジェクトは、子育て中の鑑賞者に寄り添うものであるが、それはアーティスト・マザーであるアーティストの課題を反映したものであったと言えるだろう。

託児所を設置している国内の美術館・博物館は依然として少ない。国立新美術館、東京都美術館は日時を限定した開設となっており、恒常的に託児所を開設している公立美術館は金沢21世紀美術館だけである。また、託児サービスは有料で提供されていることも留意すべきである。国立新美術館の託児サービスは原則月に3回実施され、利用時間は12:30から15:30、利用料は0歳～1歳が2,040円、2歳～12歳が1,020円である³²。NPO法人が運営する金沢21世紀美術館託児室は、平日は1時間あたり1歳未満600円、1歳以上500円、土日祝日と夜間開館のある金曜日の午後6時から8時は1歳未満800円、1歳以上700円という料金設定になっている³³。子育て中の鑑賞者がゆっくり美術館を鑑賞するコストは、通常1,000円から2,000円程度の展覧会鑑賞料にほぼ同額の託児サービスの利用料が加算され、一般の鑑賞者の約2倍となる。収入が減少する育児期間に「気軽に」利用するには大きな負担である。それは、美術館を仕事場とするアーティストにとっても同様である。金沢21世紀美術館では、アーティストが子連れで展示準備に来た場合も託児サービスの利用は可能だが、制作費を必死で削減している中、1日数千円かかる託児費用の負担は大きい。「子育てするアーティストを排除しないために」の「5. アーティストの保育料にかかる予算を考慮する」の項目はこうした状況に対する異議である³⁴。

7. 「子育て中の女性アーティストの実態調査」の追跡調査

アーティストのなかに、プロのアーティストでありたいという認識とともに一人の生活者でありたいという意識も広がっているを感じている。筆者は、2022年2月7日・8日、2018年12月に実施した「子育て中の女性アーティストの実態調査」に回答したアーティスト3人に、3年間の変化について追跡的なインタビュー調査を行った³⁵。

調査日時：2022年2月7日・8日（各2時間程度）

調査対象：2018年12月に実施した「子育て中の女性アーティストの実態調査」に回答した3名。年齢を、20代、30代、40代とした。）

調査方法：半構造化インタビュー

2018年のアンケート調査は無記名で実施したため、個人的な親交があり、アンケート調査に参加したことを確認できた3人（仮名：Aさん、Bさん、Cさん）を対象とした。3人の特性としては、2018年度のアンケート回答時に「子育てアーティストの課題」について意識化したことがあり、その後も筆者との親交から、アーティストの子育てをめぐる環境について考え、言葉にする機会が多かった対象者だと言える。

3人の属性は、Aさん：40代。子ども：9歳と5歳。夫はアーティスト。Bさん：30代。子ども：4歳と0歳。夫は会社員。Cさん：20代。子ども：3歳と1歳。夫はアーティストである。Bさん、Cさんは調査後に第2子が誕生している。調査の精度を上げるためには属性についてもう少し詳細に記述すべきであるが、個人情報公開し活動を行っているアーティストであるため、特定されないように配慮した。本調査は、2018年度調査の補足的な追跡調査という位置づけである。

この追跡調査は、ここ数年の美術界におけるジェンダー平等に対する社会的意識の高まりによって、アーティスト・マザーたちの作品制作の環境

も変化があったのではないかと仮説から実施した。仮説では、ジェンダー平等を求める社会的な変化に対して、アーティスト・マザーとして活動しやすくなったのではないかと考えたが、積極的に社会の影響について言及する意見はなかった。それ以上に、子どもの成長の変化に日々対応しており、生活スタイルも都度調整することに追われており、社会的な変化以上に、個人的な子育て環境の変化が作品制作環境にも大きく影響していた。

Aさんは、子どもを含めた日常生活をテーマにした作品を制作する作家で、子育てのエピソードも作品化している。アーティスト・マザーとして取材を受ける機会も多い。

社会的な変化と個人的な変化についての質問に、Aさんは子どもの変化の大きさについて語った。子どもが留守番をできるようになったり、一人で寝られるようになったり、という「絶対に自分じゃなきゃいけなかった部分」が少しずつ減ってきたことで時間ができるようになってきたという。その一方で、保育園への就労証明のための書類申請が精神的なプレッシャーになっていたことに気づいたという。

「(卒園するので) 保育園に行かなくなると同時に、書類を提出するために絶対に就労しなくてはいけないという義務みたいなのがないって思ったら、次の仕事を選ぶときに、フルタイムでなくてパートだっていいわけだし、そういう意味で気持ちに余裕ができたように思います」

パート勤務の場合、保育園によって預けられる時間が4時までだったり、土曜日は預けられないなどの制限が設けられる。事実、Aさんは夕方までの非常勤職員であったため、土曜日に制作時間を確保するために、ボランティアで関わっているアートNPOからの証明書を合わせて提出するなど工夫してきた。就労していることを認めてもらうというプレッシャーから解放されたことで、

アーティストとしてのどのようにキャリアを形成していくか考える時間ができた。

「何かの仕事をしながら、作品制作を続けていくというのが、結果的には一番いいんじゃないかなって思っています。作品でもし稼ぐとなると、稼げなかったときの心の負荷が大き過ぎて、制作に行き詰まるんじゃないかなって思っています。今の理想は、心の安定を保ちながら、いかに家庭を保ち、制作をするかということだから、理想もまた変わっていくと思います。が。」

アーティスト・マザーの課題について取材を受けることが増えてきたが、それは本人の意思からというよりは、作品の主題が子育てを含めた日常であり、アーティストであり母親である悩みを作品化しているため、周囲に促されてという側面がある。課題を感じないわけではないが、強いメッセージを発することには不安も感じている。

「ひたすら子育てしていて、たいへんなんです、という作家に映るのは嫌なんです。例えば、子育てしながら制作するのがたいへんだって言っている一方で、子育てしていなければ生まれない作品があるということの両方、存在していて、だから、どちらとも言い切れない。あと、アーティストとして子育てするたいへんさをメディアで語ることで、どう思われてるんだろうと考えてしまいます。慎重にしないと自分も傷つくし、いろいろな人の反感も買うかもしれないという想像が膨らんで、怖くなって、語る言葉に慎重になったりします。語ってみたら、そんなこと思っていない人のほうが多かったです。」

Aさんは、作家活動で生活を支えるだけの収入を得ることへの期待はない。なぜ自分はそこまでして作品を制作するのか、という問いに、いまだ

答えは見いだせずにいるが、とにかく作り続けようと決意している。

Bさんは第2子を出産したばかりである。予定していた個展を、コロナ禍による保育所の休園により制作が間に合わず延期を依頼し、そして、再度準備していたものの、今度は個展と関わりのあるイベント全体がなくなり延期となった。妊娠期には、別の個展搬入時に出血し、切迫早産と診断を受け、出産までの2カ月半の間、自宅安静で過ごすこととなった。一方、一般の人がアップした作品画像がTwitterで話題となり、海外の複数のインターネット・メディアから取材等の問い合わせがくるという展開もあった。自宅安静の間、長女の世話のため遠方の実母に来てもらい、さらに出産後は、期間限定という形ではあるが、両親とも近隣に移住してくれることになり助けられていると言う。

上の子が4歳になり、寝かしつけの負担も減り、一番たいへんだった時期は超えてはきたことを実感している。出産直後は、申請上は「仕事をしていない」ことから、保育園に預けられる時間は5時から4時へと繰り上がったが、実際には産休・育休はない。

「出産前、海外からの問い合わせが増え、せっかくの機会なので、できるだけ応えるようにしたんですが、切迫早産で、座って仕事をするようなことはできるだけ避け、とにかく横になっているようにと医師から言われていたのですが、これだけは今日中に英語で送らないとか。やっぱり自営業なので、事実上、育休、産休はないですね。」

メールのやりとりも多く、また作品プランを考へることなどは、授乳後、子どもが寝た細切れの時間に行っている。インタビュー時は、個展を控え、展示台を制作する作業などがあり、引越してきた母親に0歳の子の面倒を1時間ずつ2回に分けて見てもらい、1日2時間ずつ作業を進めて

いるという。Bさんの場合、ギャラリーとつながりができていたことで、アーティスト活動を継続できているという。信頼関係ができていた男性のギャラリストに第二子の出産を希望していることを事前に伝え、妊娠後の経緯なども報告し、今後の仕事についても話し合うことができた。決して打ち明けやすい話題ではなかったが、理解を得ることができ、互いの状況を共有しながらアーティストとしての仕事を行うことができている、ありがたいと感じている。

「20代の頃は、作家として活動していくにあたり、個展や賞など何かしらの成果を得るまでは子供を持つことは考えられないという感覚が漠然とあって、そろそろ思ったのが30代前半でした。人間関係やギャラリーとのつながりが少しずつできてきて、妊娠や出産で動けない期間に入っても、キャリアを途絶えさせないために、展覧会のお話をいただければ、過去の作品を出品させていただくなどという形で応えていました。作品を発表するためのつながりが全くない状態ではなかったというのが自分の中で大きかったです。」

ある程度、アート・ワールドの人間関係が構築されたことで、出産を現実的に考えることができたということだ。ただ、ギャラリーとつながるのは簡単ではない。Bさんも経験から、アーティスト自身が道を切り拓いていかねばならず、運と地道な発表の積み重ねが必要だと語る。ギャラリーと関係ができたからといって、それで単純に安定した収入に繋がるわけではないし、商業的な手法でやっていきたいわけではない。まずはきちんと生活していきたいという思いは、Aさんと共通する。

「自分の作品も含めて、アートの世界を深く楽しみ、探求している人たちと出会って、そういう方が自分の作品を支持してくれたら嬉しいというのが、自分のモチベーションです

し、きっちり生活したいという思いがあります。私の場合は子供がいるので、子供を育てて、生活をきちっと回していく。もちろんある程度の収入も関わってくるのですが、きちんと生活した上で、いろんな人たちと出会い、発表を続けていけたら、それが理想的かもしれないです。」

子育てするたいへんなアーティストだと見られたくないというのもAさんと同じだ。「子育てについて語り合う場ではないところで、「子育て中のアーティスト」として切り取られると、私は子育て中の、たいへんな、応援してあげなければいけないアーティストなのだろうか、と違和感を持つこともある」と語る。

「アーティストの活動の成果って、収益イコールじゃないですよ。収益にならない、むしろ。ならないけれど、発表した展覧会であったり、そこで与える文化的な意味や影響とか、目に見えない、数字で測れない部分の成果があるわけじゃないですか。そういう意味でアーティストのやっていることって理解されにくい。これまで積み上げてきた作品や発表活動には誇りをもっています。ですが、同時に、誰かに直接言われたわけではないですが、自分のなかに「お金にもならないのに、自分のやりたいことを優先して、子供を預けているのではないか」という声があって、将来の子供の貯金もできないような収入の少ない仕事を必死になってやって、精神不安定になって、子どもを預けて、果たして大きくなったときに、子どもはどう思うんだろうって。その背中を見てくれるのか、子どもたちをほったらかして母親はやりたいことやってたって思われるのか。」

安定した収入に繋がりにくいアーティストとしての活動にどう意味を見出し、継続していくのか。逡巡しながらも、とにかく継続するという意

志を貫き、考え続けていくという態度はAさんと共通する。ロールモデルがおらず、アーティストのキャリアと子育てをどう両立していくか、今を生きるアーティストたちが模索している状況だと言える。³⁶

アーティストとしてのキャリアをある程度積んだ30代で出産したAさん、Bさんに対し、大学院在学中に産後、第二子も大学院修了後すぐに誕生したCさんのケースはずいぶん異なる。周りに子どもがいる友人も少ない。Cさんは、インタビュー時、就職に向けた勉強に集中していた時期であった。アーティストであることにこだわらないというというのがCさんの姿勢である。

「2人目生まれて、朝早く起きて、朝の2時間で描いてるので、それができたから今後もできるなって感じています。子育ても山を越えて落ち着いていくはずなので、絶対描くと今は思ってます。もし、自分がアーティストだって思ったほうが描き進められるのであれば、アーティストって思いたい。アーティストだから描いているわけでもないし、アートをしたくてなったわけじゃなくて、描きたくて、こうなってしまった。趣味かと言われたら趣味でもいい。どう捉えてもらっても結構です、という立場です。」

Cさんは、2人の子育てにかかる負担をほとんど語らない。個展のために早朝2時間で制作する自分の可能性を信じている。また、アーティストであることにこだわらない自由さもある。すでに個展も開き、アーティストとしてのキャリアをスタートさせているCさんであるが、絵を描き続けるし、それが趣味と呼ばれてもかまわないと言う。それがCさんの特性なのか、20代のキャリア初期だからこそ将来の可能性が広がっていることなのかは定かではないが、子育てをするアーティストたちがみな苦悩しているわけではないこともまた事実である。

ジュダーは「めいいっぱい、めちゃくちゃで、美しい」の最後に、明るい兆しについて述べている。イギリスのギャラリーに、展覧会を準備するアーティストの家族のケアを負担するところも現れており、若い世代のアーティストやキュレーターから変わり始めているという。経費だけでなく、設営に子どもを連れてくるのか、ケアする人がいたほうがいいのか、オープニングに作家はいたほうがいいのかなど細かな対応が必要で、そうすることで多様な背景のアーティストが活躍できるようになるとジュダーは締めくくる。ジェンダー意識の高まりを背景に、アーティスト・マザーたちの居場所はおそらく広がっていくに違いない。そのために何が必要か議論を深めていく必要があるだろう。

最後に

ジェンダー平等に対する社会的意識が高まるなか、アーティスト・マザーたちも声をあげ始めている。最も大きな課題は、出産育児でキャリアを断絶しないですむシステムの構築である。20代、30代というアーティストとしてのキャリアのスタートを切る重要なタイミングと出産育児が重なりがちであり、キャリアが中断することで、人間関係が途絶え、再スタートを切ることが大きなハンデとなっている。「子育てアーティストを排除しないために」は子育てアーティストたちが作品を発表し続けられる環境を整えてほしいという叫びである。

アーティスト・マザーの課題は、アーティストの収入源の確保、身体を伴うフリーランス労働者の育児負担、アート・ワールドにおけるジェンダー不平等や多様性への配慮、芸術労働者のやりがい搾取、権威主義的な評価のあり方など、いくつもの社会的課題を内包している。また、作品を生産するアーティストだけの問題ではなく、芸術表現を享受する鑑賞者の問題でもある。芸術に限られた人だけのものではなく、社会全体の財産としてとらえていくことが重要である。アーティスト・

マザーを含め、社会が、多様な立場のアーティストによる多様な表現を求め、育てていくという価値観を共有していく必要があるだろう。

【注】

- 1 「アーティスト・マザー」の呼称は、ジュダーのテキストから引用し、子を養育している女性アーティストを指すこととする。Hettie Judah, "Full, Messy and Beautiful", *Representation of Female Artists in Britain During 2019*, Freeland Foundation, 2020, pp.14-19.
- 2 美術史におけるジェンダー不均衡を指摘したのは、リンダ・ノックリン著、松岡和子訳「なぜ女性の大芸術家は現れないのか」(『美術手帖』28号, 1976, pp.46-83.) が端緒とされている。
- 3 北原恵『アート・アクティヴィズム』イザラ書房, 1999, pp.12-13.
- 4 日本にジェンダー視点の展覧会を積極的に導入した学芸員の一人小勝禮子は、1998年の『LR 美術批評/展覧会批評誌』のジェンダー論争について記事をPDF化し、まとめている。<https://asianw-art.com/profile/> (最終アクセス, 2022年9月24日)
- 5 MoMA (ニューヨーク近代美術館, アメリカ) の収蔵作家の生年別ジェンダー比 (2016年): Jordan Vani, "MoMA has a Gender Problem", <https://www.jordanvani.com/post/moma.html>
テート・ギャラリー (イギリス) 収蔵作家の生年別ジェンダー比 (2019年):
"Museum art collections are very male and very white" <https://www.theguardian.com/news/datablog/2019/may/21/museum-art-collections-study-very-male-very-white>
カナダの主要施設における生存作家の個展のジェンダー比 (2015年): Cooley, Luo, & Morgan-Feir, *Canada's Galleries Fall Short: The Not-So Great White North*, 2015
ドイツアート界のジェンダーギャップ (2021年): <https://namiberlin.com/fair-share/> など。
(以上すべて最終アクセス: 2022年9月23日)
- 6 「アート・ワールド」とは、広義には美術界を指すが、狭義には著名な芸術家、美術批評家、学芸員

- (キュレーター), 美術商 (ギャラリスト) などの一定の権威を有する社会集団を指す。ハワード・ベッカー『アート・ワールド』慶応義塾大学出版会, 2016など参照。
- 7 アートニュースジャパン「2022年ヴェネチア・ビエンナーレを数字で解析。注目は女性作家と20世紀の前衛芸術家」2022年2月11日。https://artnewsjapan.com/news_criticism/article/60 (最終アクセス: 2022年9月23日)
- 8 ウェブ版美術手帖「女性アーティストの作品のみを収蔵・展示。ボルチモア美術館の「2020 Vision」とは?」2020年3月11日。<https://bijutsutecho.com/magazine/news/headline/21480> (最終アクセス: 2022年9月23日)
- 9 ウェブ版美術手帖「日本の美術界を取り巻くジェンダーを考える。シリーズ: ジェンダーフリーは可能か? (プロローグ)」2019年6月4日。<https://bijutsutecho.com/magazine/series/s21/19908> (最終アクセス: 2022年9月23日)
- 10 Hettie Judah, 2020
- 11 <http://artist-parents.com/more/> (最終アクセス: 2022年9月23日)。日本語への翻訳は, アーティストのBack and Forth Collectiveメンバー (滝朝子, 本間メイ, 坂本夏海), Timeline Projectメンバー (長倉友紀子, 渡辺泰子), 田中功起, キュレーター 徳山由香, 日本在住のイギリス人アーティストでキュレーターのキャサリン・ハリントンが手掛けた。筆者が坂本にメールで経緯について問い合わせたところ2022年11月28日に回答もらった。坂本によれば, マニフェストは2021年3月4日にロンドンのフリーランス財団が主催したオンラインディスカッション「アーティスト・マザーを排除しないために」で発表された。このオンラインディスカッションを坂本と長倉が視聴。坂本はBack and Forth Collectiveのメンバーに声掛けをし, 皆でこのマニフェストを読むことになった。その後, このマニフェストの翻訳が様々な言語で公開されているのを受けて, 坂本が上記のアーティストたちに声掛けをし, 日本語訳をしたいとジューダー氏に連絡し, 翻訳することになったという。
- 12 Hettie Judah, 2020。日本語訳は筆者。
- 13 「注目すべきデータと調査結果を踏まえた政府への要望」雇用関係によらない働き方と子育て研究会緊急アンケート2017年度版」https://blog.freelance-jp.org/wp-content/uploads/2018/02/20180222_wap_proposal.pdf (最終アクセス: 2022年9月23日)
- 14 フリーランスの人口は2019年のCOVID-19拡大以降はさらに増加し, 2021年の調査では1577万人となっている。(ランサーズ「新・フリーランス実態調査 2021-2022年版」)https://speakerdeck.com/lancers_pr/xin-huriransushi-tai-diao-cha-2021-2022nian-ban (最終アクセス: 2022年9月23日)
- 15 Hettie Judah, 2020。タイトルは筆者の訳による。
- 16 高橋律子「子育て中の女性アーティストに関する実態調査」『まちと暮らし研究』29号, 地域生活研究所, 2019, pp.60-70
- 17 Hettie Judah, 2020
- 18 山本和弘「アーティストのサバイバル 第一回実態調査」『科学研究費助成事業研究成果報告書』2014 <https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-24520199/24520199seika.pdf> (最終アクセス: 2022年9月23日)
- 19 厚生労働省「2019年国民生活基礎調査の概況」<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/index.html> (最終アクセス: 2022年9月23日)
- 20 「夫婦の就労実態」に関するアンケート調査 (2016年)
https://www.lisalisa50.com/research20161128_15.html (最終アクセス: 2022年9月23日)
- 21 NHKウェブ特集「育児の始まりは創作の終わり?」<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20211227/k10013403651000.html> (最終アクセス: 2022年9月23日)
- 22 文化庁ウェブサイト「文化芸術活動の継続支援事業」https://www.bunka.go.jp/shinsei_boshu/kobo/20200706.html (最終アクセス: 2022年9月23日)
- 23 令和3年度 文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業「新型コロナウイルス感染症の影響に伴う諸外国の文化政策の構造変化に関する研究」獨協大学, 2022
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/pdf/93709801_01.pdf (最終アクセス: 2022年9月23日)
- 24 山本麻友美「アーティストの証明——制度のなかで見えてきたこと」https://artscape.jp/report/curator/10164668_1634.html (最終アクセス: 2022年9月23日)

- 25 高橋かおり「芸術に関わり続ける工夫—在外芸術家の経験の分析を通じて」『社会学論集』18号, 2019
https://www.chukyo-u.ac.jp/educate/gendaisyakai/results/2019/2019_03_ronshu.pdf (最終アクセス: 2022年9月23日)
- 26 浅井南「若手現代美術作家の制作活動と戦略的な不安定さ」第93回日本社会学会口頭発表(2020年10月31日)。文化政策学会の企画フォーラム月間「アーティストの生活をどのように調査するのか?—研究と実践の協働に向けて」で発表(2020年12月6日)。
- 27 吉澤弥生「芸術労働者の権利と連帯」山田創平編『未来とアートの倫理のために』左右社, p.65
- 28 片岡栄美『趣味の社会学 文化・階層・ジェンダー』青弓社, 2019などを参照。
- 29 Cameron, Duncan, "The Museum: a Temple or the Forum". *Journal of World History/Cahiers d'histoire mondiale*, 14, 1974, pp.189-202.
- 30 櫻村愛子「社会とアートの関係とその変容を社会的に分析すること」から, 北田暁大・神野真吾・竹田恵子(社会の芸術フォーラム運営委員会)編『社会の芸術/芸術の社会』(2016)についての書評など
- 31 「森美術館に託児所を。Chim ↑ Pomが「くらいんぐみゅーじあむ」のためのクラファンを開始」
<https://bijutsutecho.com/magazine/news/headline/25095> (最終アクセス: 2022年9月23日)
- 32 国立新美術館「託児サービスのご案内」(2022年9月23日時点の情報)
<https://www.nact.jp/information/nursing/>
- 33 金沢21世紀美術館ウェブサイト(2022年9月23日時点の情報) https://www.kanazawa21.jp/data_list.php?g=10&d=4
- 34 美術館学芸員として従事してきた筆者の参与観察によれば, 2010年代から, 美術館展覧会に出品するアーティストが家族連れで設営に来るケースが増えてきている。小さな子ども連れの場合, 託児サービスに預けるよりは, ホテル内で家族がケアするほか, 美術館スタッフが一時的に事務所でケアしたり, 少し年長の場合は展示室内で親の作業を見ながら, 過ごしたりもしている。美術館がそうした家族連れのアーティストたちのそれぞれの状況への柔軟な対応が見られるようになってきた一方, そのコストをだれが負担するかという点
- に關しての議論は進んでいない。
- 35 本調査は金沢大学の人を対象とした調査倫理審査委員会の承認を得て実施した。また, 2021年度笹川科学研究助成を受け実施した。
- 36 本論考の確認をBさんに依頼した後, 2022年11月15日にBさんと話をする機会を得た。Bさんはインタビュー時はまだアーティストとしての仕事に復帰していなかったが, 復帰後の現在はまた状況が変わり, 子育てと制作の両立についての意見や感情がまた変化しつつあるという。継続的に調査していきたい。